

エネルギーを 学ぶ・伝える・考える



新潟県内では2~3カ所で生息地が確認されているオキナグサ。新潟県絶滅危惧Ⅰ類、環境省絶滅危惧Ⅱ類に指定されています

新潟県中越地震をきっかけに 始まった保全活動

キンポウゲ科の「オキナグサ」は、日常の良い草原や土手、畔あぜなどに生育し、春に赤紫色の花を咲かせます。以前は広く分布していましたが、除草剤の使用や管理放棄、採取などにより激減し、現在、新潟県絶滅危惧Ⅰ類、環境省絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

2004年6月、広神西小学校の学区内にある大芋川区で、棚田の畔に県内最大級のオキナグサの群落が確認されました。しかし、その年の10月23日に新潟県中越地震が発生します。小学校周辺も震度6弱を記録。大きな余震が続き、山崩れや土砂崩れなどを引き起こしました。大芋川区の棚田にも畔にひびや割れ目が入り、翌年の春に再整備工事が行われることになりました。オキナグサの絶滅を心配した集落の方々は、広神西小学校や県立植物園に協力を依頼し、生き残ったオキナグサを掘り出し、植物園で栽培して植え戻すなどの保全活動が始まりました。

オキナグサを通して 地域の豊かな自然に気付く

自然を守るためには息の長い活動が重要です。広神西小学校では約20年間に渡り、県立植物園の助言を受けながら集落や市民の方々と活動を続けてきました。活動に取り組むのは4年生。「総合的な学習の時間」を活用し、1年を通して大芋川区の自然を学び、オキナグサの保全活動を行います。2022年度に4年生を担任した田沢先生は「当校のビオトープである『ひょうたん池』の斜面には、移植したオキナグサが花を咲かせます。また、学習発表会や校内発表で活動報告も行っているため、低学年の子どもたちも活動を意識していますね」と話します。

4月、活動は「自然観察会」から始まります。実際に大芋川区を訪れ、県立植物園の先生からオキナグサの特徴などについて学びます。オキナグサの花を観察し、写生した子どもたちは「大芋川は自然が豊かだと分かりました。もっと観察してみたいです」などと、活動への意欲が湧いてきたようでした。

地域の人々と連携し、 地域の宝を守り伝える

新潟県南東部に位置し、周囲を山々に囲まれた魚沼市。冬は3メートルほどの積雪になる豪雪地帯ですが、夏の気温は高く、はつきりとした四季の移ろいを感じることができます。

魚沼市立広神西ひろかみにし小学校は、1980年4月、市内4校が統合して開校しました。「ひとりでもみんなと」さらに「自立・共生・挑戦」を教育目標に、130人の子どもたちが学んでいます。力を入れているのは、魚沼市全体で取り組んでいる「温かい学級づくり」。より良い学校生活を送るためのアンケートを活用して子どもたちの状態を把握しながらつながりを深め、やりとりが活発に行われる「多様性を包含する学級集団」を目指しています。

自然豊かな学区には、地域の宝がたくさん隠れています。宝を見つける鍵を教えてくださいるのは、地域の方々。「総合的な学習の時間」などを活用した絶滅危惧種の「オキナグサ」の保全活動など、地域の宝を守り伝える活動について、江田浩校長と田沢健太先生に伺いました。

訪れた場所

魚沼市立広神西小学校

新潟県魚沼市親柄107番地1



▲田沢先生が担任した2022年度の4年生。植物園の先生や地域の方々と一緒に撮影



▲お話を伺った田沢健太先生



1. 長い綿毛に覆われたオキナグサから、1本ずつ丁寧に種を抜き取り、綿毛をハサミで短く切って学校に持ち帰ります
2. 4月に大芋川区で行った「自然観察会」で、オキナグサを写生する子どもたち
3. 雑草があるとオキナグサが十分に生育しないため、手作業で雑草を取り除き、元の場所に植え替えます



「自分たちで守りたい」 気持ちが芽生える

オキナグサの和名は翁草。花が終わると種子が付いた白く長い綿毛で覆われ、翁(おじいさん)の別称)のような姿に変わります。5月、子どもたちは種を採取するために大芋川区を訪れました。綿毛が付いたまま植えると育ちにくいいため、1本ずつ種を抜き取ると綿毛をハサミで切り、袋に入れていきます。学校に戻ると、1人1つのポットに5粒ほどの種を植えました。うまく発芽させるポイントは土が乾かないように水をあげることをさそうです。「種の大きさはチューリップの球根くらいかと思っていたら小さくてびっくりしました」。

学校では、県立植物園の先生から学校周辺と大芋川区の植生の違いや大芋川区でオキナグサと共生する植物などを教えてもらいました。「植物を育てるにはいろいろな工夫が必要で大変だなと思いました。大きく育つように願いながら、水やりを頑張ろうと思います」と子どもたち。オキナグサを「自分たちで守りたい」という気持ちが芽生えてきました。

子どもたちと地元の方々との つながりを育む

7月、子どもたちは大芋川区の草刈りに出掛けます。オキナグサは草刈りをしないと雑草に負けてしまい、除草剤を使えば枯れてしまいます。前回の活動で、オキナグサを守るためには手作業の草刈りが必要だと知った子どもたち。「草刈りを手伝いたい」と意気込みます。最初は大芋川区の住民の願いを受けて、県立植物園や市役所の方々始めた活動でしたが、今ではNPO法人や地域コミュニティ協議会など一緒に活動する仲間も増えました。「広神西小学校は各学年の児童数が20人ほどで、人間関係が固定化してしまう側面もあります。それだけに、地域の方々に関わることは大切な機会になっています」と江田校長。

草刈りに使うのは、大きな鎌。庭の草むしりを手伝ったことのある子どもたちも、初めての経験です。

「小さなオキナグサもあって見分けながら刈るのが大変でしたが、みんなが笑顔で草刈りしてうれしくなりました」。

多くの人にオキナグサの 価値を伝える広報活動

10月、子どもたちは再び大芋川区を訪れ、植え戻しを行いました。春に種を植えたオキナグサは、水やりや間引きなどを行って、立派な苗に育っていました。

同月、小学校では毎年恒例の学習発表会が行われます。お礼の気持ちを込めて、4年生はこれまでお世話になった人たちを招待したそうです。発表会ではオキナグサに関する発表も行いました。

発表会が終わると豪雪地帯の魚沼地区に冬がやってきます。「オキナグサを守り育てるためには広報活動が重要です」と田沢先生。子どもたちは大芋川の自然やオキナグサの保全活動をPRする看板を仕上げました。「最初はオキナグサだけが大切だと思っていたけれど、他の植物や生き物も大切だと思いました。中越地震があっても人が少なくなったらけれど、オキナグサや他の植物、生き物を守りたいと聞いて私たちもその思いに応えたいと思いました」と子どもたち。カラフルな看板は、来年の春、群生地や学校などに立てられます。

地域と一緒に継続した 取り組みが高い評価を受ける

2021年度、これらの活動が認められ新潟県環境賞(環境保全部門)を受賞、さらに2022年度、環境省の「地域環境保全功労者表彰」を受賞しました。

「地域と一体となつていくこと、そして継続的な取り組みであることが評価されたと考えています。子どもたちには『先輩たちと一緒に受賞した賞です。受け継いで続けてきたことが評価されたのだから、来年も再来年も大事にしていこう』と話しました」と江田校長。活動が認められたことや地元紙に取り上げられたことが自信につながり、「オキナグサを守っていく」という意識が高まりました。

4年生でオキナグサの保全活動を行った子どもたちは、5年生でお米作りを行います。先生は学校田のすぐそばに住んでいる地元の方です。広神西小学校では、他の学年でも「生活」や「総合的な学習の時間」を活用し、地域の方々と一緒に、子どもたちが故郷の特徴や良さを見つめる活動を行っています。



4. 2022年11月に開催された「にいがた環境フェスティバル2022」で掲示した壁新聞
5. 採取したオキナグサの種を学校に持ち帰り、植物園の先生から話を聞き1人1人ポットに種を植えます。9月に育てたオキナグサを植え戻しました
6. 下は新潟県環境賞環境保全部門、上は環境省2022年度「地域環境保全功労者表彰」受賞時の賞状

1、3年生が挑んだ

「あかもん」かぼちゃの販売

2022年度、1、3年生の63人は農産物直売所「魚沼園芸ものずき村」などの協力を得て地元特産のかぼちゃ「あかもん」を育てました。直売所の人気商品で、皮が赤く強い甘みが特徴です。

6月、学年の枠を超えた縦割りの12班に分かれ、学校の畑や地域の人が貸してくれた畑に苗の植え付けを行いました。蔓の方向付けや実の世話などをして、夏休みが終わった9月に収穫です。そして、東京の渋谷区にあるアンテナショップ「表参道・新潟館ネスパス」で販売しました。売り場の飾りを作り、店と学校をオンラインでつないで買ひ物客に「あかもん」の魅力を伝えます。「甘いのでぜひ買ってください」などと売り込むのは3年生。1、2年生は盛り上げ役です。「お客さんは興味を示し、いろいろなやりとりをしてくださいました」と江田校長。買ひ物客が画面越しに「買います」と話すと、子どもたちは飛び上がって喜び、地元の名産品を知ってもらい喜びを感じたそうです。

故郷への誇りが

地域の未来を創る

1年を通してオキナグサの保全活動を行った田沢先生は「子どもたちは大芋川区が大好きになりました。行くたびに発見があり、目を輝かせて自然を観察しているのが印象的でした」と話します。校内のビオトープに植えたオキナグサを見に行く回数も増え、「先生、花が咲いたよ」「ひげの毛が出てきたよ」などと変化にも気付くようになったそうです。

それは子どもたちの言葉を見ても分かります。「大芋川に5回行って、大芋川が私たちの生活を変え、私たちが大芋川を変えていると思いました。だから、これからも助け合い、大芋川のため、りっぱな6年生になるために取り組んでいきたいです」。田沢先生は「オキナグサは広神地区、魚沼市の宝です。大事にしてほしいですし、自分たちが守るといふ誇りを持って、生活してほしいと思います」と期待を寄せています。オキナグサ、そして故郷を大事にしたいという思いが、毎年積み重ねられていく。子どもたちは、身近な自然を守ることで地球全体の環境を守るこの大切さにも想いを馳せているようです。

環境教育への思い

校長 江田浩先生

広神一帯は本当に自然が豊かで、地域の財産がたくさんある町だと思います。どこに行けば、どんな良さがあるのか。一番、ご存じなのは地域の方々です。オキナグサの保全活動もそうですが、地域との結びつきを広げていくことで、地域の方々にも自分たちの地域の魅力を再発見してもらえ、子どもたちもより良く成長してくれていると実感しています。



7. 学校とアンテナショップをリモートでつないで地元のかぼちゃ「あかもん」の魅力をPR
8. 「あかもん」は、リモート販売だけではなく広神西小学校でも対面で販売しました。子どもたちは大きな声でおいしさをアピールしたそうです